

市古物管理處

文之財調查報告書

昭和四十年 六月 三十一日

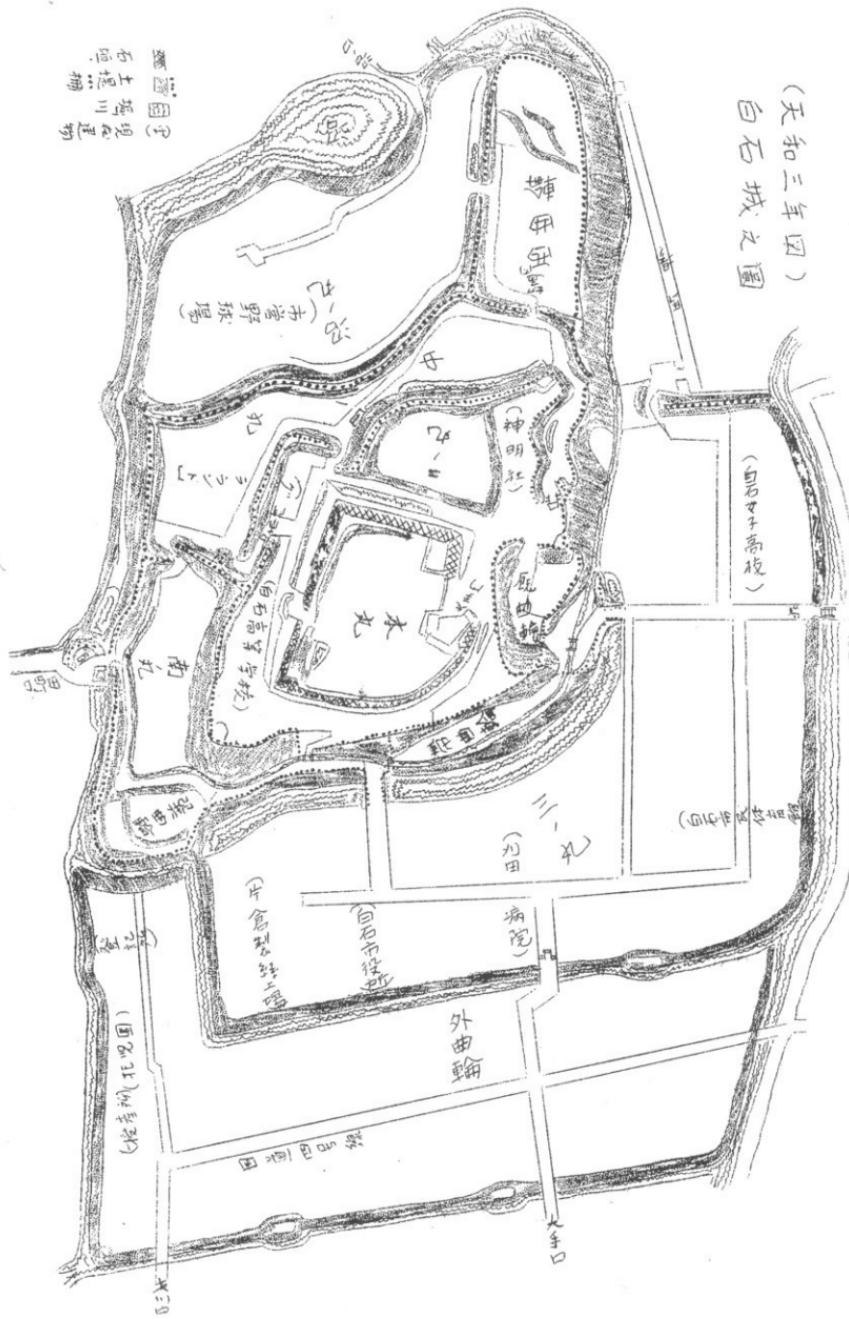
白石城址調査報告書

白石市文化財保護委員會

片倉信光

(天和三年四月)
白石城之圖

(自古女子高校)



白石城址調査報告書
片倉信光

「東北の咽喉」と古来称されて、さとう氏・川田郡の地勢は、陣附上から見て、東北守備の關門をなす

当要地帯に当たつてゐる。白河関に次いで、刈田關以北には、南から侵入する大軍を容易に防禦できず、地形は、ほとんど無い。關内七十余ヶ敷之る大小諸城址は、この地の重寧さと裏付け、自古城は常に、その中継をはず位置にある。日本武尊や田村麻呂の伝説が語り伝えられてゐるのも、この地に歴代民衆の歴史的活動を認めてよいであろう。中世以降、日本刀史の振興期には必ず、その影響を受けているが故も、古墳の古墳と見紛うるものもある。以下、白石城の沿革と歴史、次いで、その現状が記述と統して廃棄とする。

白石城の沿革
刈田氏以前

古い白石城が存在したと伝承されるのは、白石市元山地区である。白石高野寺跡などとは空城を前に、その一連の丘陵上は、明らかに平畠地となり、西方には段丘及人工的凹凸地形と認められ、平安朝時代と推定され、築城や耕作や平野に出土している。想らくは有力な地方豪族が築城が幸運年の建造物が

行なし次第アラカウ。

川田氏時代

前述様三ラ函段は東北地方にとつての大物ぞアラカウ。川田郡内名地に源賴義、義家父子の伝説が残存していり。鉢巻山南、森合・中自更他であるが、これらは伝承也と、元山丘陵は田畠の低地を的て、相對していり。

以上を背景にして天正三年版に戰功五万石・兵刃田左兵衛尉経基が、川田伊良二郎五助より白石城に入り、天正二年であると云う史實を以つて白石城の名が史上に現れるのである。

經基は「天正十五年六月によれば、直理權太夫兼系経清の子であり奥六郎を領し、大蘇原清衡の弟である。然が川田氏を率し兵ことは古くから一ノ地に勢力を擕いでいた一族であらう。

笠原 元輔 美経 宏信

天正十四年、内藤城下。天治五年八月、源賴朝が鍋倉守府を開くにあたり平泉の源賴泰衡を討伐した際、李備は伊達川田の田畠を奪ひて山で斗死を遂げた。

白石氏時代

同じ合戦で前文表は、頼朝方に隸して尼安・助政・戰功により今年十月、兄李備の領地川田伊良二郎を賜りて白石城に入り、姓を白石氏と改めた。

秀政 長政 長勝 宗弘 宗綱 宗廣 宗親 宗信 宗徳 宗長 宗清 宗綱 宗利 宗貞
十五代三百九十七年間住城の後、天正十四年信夫則盛松城に移封され川代。こう向館舎の文物を移入し、伊達家より養子を組み、南北朝時代伊達家と行動を共にした。

屋代氏時代

天正十四年白石氏に代り、伊達政宗を屋代駆除由を請え輪公城代として天正十九年近江の昇開任城した。

蒲生氏時代

天正十九年、豊臣秀吉は伊達政宗領地を没収して、岩手山に移り、伊達領には蒲生義郷が氏郷を封した。川田郡は蒲生領に編入され蒲生源左衛門綱成が四千石百領して白石城に居た。

伊達領と境を接し且政宗の目付帳を貰う氏郷は、中世城郭の白石城を、鐵砲主政所代に対する三十尺の城郭として新しく築きを行い、城丘の北端に移し城下町を築いて白石城を新たに築いた。旋即城外固城」と蒲生記に記す平山城の形式を採った直世城郭である。当時、池神社祭事の大權下人貴守の石碑を建てたとある。

在城七年，度長三年二月，常陞圓蓋冠八移之次

上
杉
氏
時
代

新兵の様子を見て、上校は満顔となり、甘利機関車営業部へ入城し、慶喜五年七月月並並成一兵、城郭としては御生長時代と大差は無かつてあろう。只だ西園氏がより移封相つて命じて来くいたのが要所と伝えていふ。前史これまでう。

未だ終りぬ。西日本は天下統一最後の合戦として赤穂弾壓による内ヶ浦合戦が竹内承氏。慶長五年七月二十四日、赤穂主義家が領地にて、二十六日、三月十三日。

伊達時代(白川氏)
片倉氏

但し鎌に傾したる石城は直ちに修理を着手し八月十四日石川大和路光下へ入敷三千余人を副にて守備を命ぜられ候。

度長七年二月八日、直理在城の片倉十郎兼綱は白石城襲り兵所出で此處へ八年二月八日入城武を
行ひ、三月三日領内に位置區分し百姓七分の細野地割付を行ひ尺。次いで新領内を巡見終り、九月十
日、惣作戸城内に召對せナケル時ノ用度を行ひ尺。城郭内外の増築某としく、城門を増し、木を固
め、塙を修理し、からめて城郭を益強し、地盤水害を調査し雨水落溜を整備し、大いに領内の開拓

城下六町（本町中町表町並理町短ヶ町新町）の町屋を拡張し城下火の用べの町割を行つた。

白石城は白石瀬の増田、城とて重臣使命を仰ぐといふ。伊達家では城領りを命じてある片倉領内川田郡内十八ヶ村の拜顕山林筋地場山川使に自由にして白石城守者諸候腹に使用出来候、そつて大入合十村をでは大肝入所入百姓らと自分で植かてば諸竹不も自分で自由にければなりずす片倉家の指揮に従ひ許可を拂はなければ使用出来ながつた。

文元年江戸小石川屋清秀には空手術として工事吉指揮 日前家臣田中參加してい。第ニ舞序
並御斜地庭跡 享和元年明州長崎上百姓騒動 文久三年エゾ也警備參加 文久三年春天皇石清水八
幡御幸に片倉景泰以下供奉 京都御所守護を勤めた。嘉永四年以降領内南都山に於て片倉家中織合通商
を行ひ、異国物交來の尺の海岸堅綱互坦当する者也 出火一とい。

大石垣の所を廢城があり、音澤半太郎大河原木本丸有等三十三ヶ所前様の所あり、文政二年五月本丸の大火あり五ヶ年間に湯浦幕命と得て再建した。

現在には、官軍の命により会津府磐台命出川水仙台番は、本陣を白石城に設け、ここに東北二十五藩主会同して御朝列席開道を結び、会津番の助命救難と竹下尺が官軍の盾から所となりす。並水東北第一は官節と交換状態に入つた。片倉家も看地に出陣戦斗を行つた。敗戦れて仙台藩は六十二万石以下一百四十石に減せられ、昭和元年十月九日片倉用通は白石城を官軍に開け放し大。

伊達氏時代、石川大和昭光について、片倉家は、音澤、中瀬、豊後、村長、村定、村信、村原、村忠、豊前、宇都、那須（安國、景光）十一代三百六十六年在城した。

南即氏時代

明治元年十二月十七日、白石城を合りて仙南五郡は属國の南郡利賀領十三万石に編入され、二年四月十一日発引表され、八月十三日満主入城、今九月一十日迄在城した。

白石城設置

明治一年八月七日白石縣（武井守正知事）が認讃され、十二月九日廢止され角田縣大改められ白石には文部省が置かれ七年五月十九日よりて施三水尺。

按察府設置

新政府は明治二年八月十四日兩相三陸磐城郡祭府（長寶坊城候爵）を白石城に置き、翌三年十月六日廢し尺。

白石城は旧片倉家領の開拓所の櫛り、十月十五日元播磨守の許可を得て百五十石を以つて開拓臺、松下げ尺。片倉家半七、喜多直政歩兵頭用に至く尺。

東北鎮台安七所

その後角田官で白石城を買上げ、明治四年四月に安井有事中鎮台兵一ヶ郡同山番兵一大隊が入城屯所にありて尺。三ノ丸の北小路頭小路の居間を取払い調理物を設け洋式の陳設を行つた。同年十一月一日に長崎停止となり長崎は仙台鎮台に移つた。

白石城全地拝下寸

長崎移駐後、白石城全體を再び松下げ川田郡邑長山田信康が二月を受けて、明治七年五月十日白石天守廢止後、七月廿八日、白石城跡は音澤半太郎大河原木本丸有等三十三ヶ所前様の所あり、文政二年五月本丸の大火あり五ヶ年間に湯浦幕命と得て再建した。

ここに白石城は完全に式解を解かれたことになり、伊達家入城以来三百六十八年、備生築城後三百

八十三年、川田氏入城以来七百八十六年目である。

益岡公園設定

明治三十三年五月十日、東宮殿下（大正天皇）御成婚を記念して、白石城址を公園として松風公園として現在に至つてゐる。

白石城の位置

白石城は正確に北緯三十八度線上に位置してゐる。

交通上の位置

白石城は江戸より仙台への奥州街道筋にあり、七ヶ宿及越後を通じて米天下ノ山山形支西日本に通じ、東は南田丸森を経て太平洋海岸通り相馬に通する交通の要路に当つてゐる。

地勢上からは、東北の第一の関門に当る所で奥州街道は阿武隈、奥羽西山脉の支脉が共する山間に峠を通過する地勢を約してゐる。

城を中心には南は「本丸より一里の内内々坂有り、道の兩側所々山廻リ」。東は「庄内道」で、北は「の間を行き、北は「本丸より三三里四五里五も坂急し」と平塙地図では「本丸より八九町程は平地田畠、それより五六里まで山道坂あり」とある。南は地帶が東北の咽喉に当る場所で、仙台藩領の要害地として用兵被成り地形であつた。寛永時代は川田郡によってその死体を制せらるゝ。自古城周辺の地名を古舊は次のようになつてゐる。

東は山、本丸より南印原の方、本丸より北印原はかり平塙田畠、それより小山諸々、

南は山、本丸より半米畠の方、城より間々小山、粗手の方は山まで七八丈四畳、

西は山、本丸より西成の方、八九町桂の内半地田畠、其より小山にて大山續き

北は山、本丸より亥子の方、本丸より五六町平地、川原甚なり小山に一大山續きし

さくに城廻り山の遠近高低を測量していろ

つ一一、城廻り山の遠近

一卯の方、平代山、本丸より九丁四十六間、本丸より四間半高し

一巳の方、新館、本丸より六丁四十間、本丸地形に入向半高し

一己半の方、新館山、本丸より八丁、本丸地形より九間三尺高し、天神堂の基にて

一己半の方、坂、本丸より八丁廿間本丸地形五尺高し、(江戸街道)

一午の方、八幡山、本丸より前附せ間、加藤跡附屢數兩々かへて、本丸地形八尺高し

一申の方、八森山、本丸より廿七町半、本丸地形四丁高し

一十九、岸、本丸より二十六町半、本丸地形八三町高し(米沢街道)

一二十、一本木、本丸より九町、本丸地形一間五尺高し

一三十、鬼岳山、本丸より十三町前附地、本丸地形六十四町半高し

一戌の方、巖山、本丸より三十五町、本丸より十三町高し

一子の方、柳原山、本丸より八町三十五間、本丸地形四間高し

一辰の方、人橋場、本丸よりヒ町半間

一巳の方、住吉崎、本丸より武十町三十五間、川原地形八武拾七町半高し

一辰の方、蒲川橋、拾七町四十間

以上之より、白石城は、東南西三方を山に囲まれて白石盆地の北西側にあり標高七十六米の銀丘
丘陵北端迄延びて築かれている

城郭の現状

刈田 白石氏時代

刈田氏、白石氏時代の白石城は、現在の丸山地区である。南は常林寺南方八幡坂の凹路、北は現在の空堀通りの凹路の中间丘陵がその位置である。西には植山を林した。

山頂は平坦な鳥居址及、銀があり、兩端は板々がありぬ出郭はともに城と稱し、其間に御殿があり、御主が在住した。

明かに第弐と認められる。吉見塹園の井戸は当時の井戸と称し、其所に御殿があり、御主が在住した。

発生上極時代の白石城の圖はまだ皆見えぬれど、伊達鶴有時代の白石城の圖は数種現存してゐる。

右及び記述欄によれば、初期と中期に於ては、根本的な城郭地形の変遷は認められぬようである。

元和一回一城令以後に於て大變換が実行は爲えり得ないが、御の呼名及その範囲に多少の差がある。

伊達時代の初期の規模

江戸時代初期と推定される。仙台城名白石城御火薬を託した文書(亘理氏城 菊連御用金蔵)によれば、白石城は平山城で、天守五重・本丸、二の曲輪、外曲輪、巻廻郭の四区に分れていたことが判

る。二小字は丘陵上に付けて有りし天守と有る御用書である。
天守 五年白石御量による白石城並下陰國によれば、城郭の規模は丘陵下まで拡大させている。全國も城在地内に全く様變更を加えて擴がつてゐる。走ば天守、曲輪は互に構成されてゐる。その丘陵の前後、必然に接つて三段に配置されてゐる。

本丸

沼の丸

三の丸

二の丸

南の丸

中ノ丸

東の曲輪

西の曲輪

南の曲輪

三の丸外曲輪は丘陵の麓東方平坦地にあり、丘陵の縁端をめぐつて、中段の小曲輪が既に造立され、丘陵南部に本丸二丸の中の走る曲輪があつた。平坦地中所丸城(高基寺より)本丸は十三間三尺三寸四分、また新附からは十一間五尺四寸一分高いとある。

○本丸を中心にして位置をみれば南に南丸、南面に中ノ丸、西面に沼の丸、西北に西の曲輪、北面に北の

西牆 東北方に帶曲輪、南西方に吳門輪、平組吧北方から東南方に広くヨリ丸その東西に外曲輪がある。

○城の広さ（一記録により多少の差異がある。）

本丸、東面六十間、南面五十二間

本丸廻り二百二十六間

二丸丸、本丸より一尺五寸前

東面三十間、南北五十二間

二の丸廻り四百八十間余

三の丸より中の東南の外丸より九百四十間余

西曲輪より酒の丸廻り三百六間余

外曲輪廻り四百三十間余

○西牆 本丸 縦横數三千八百九十九坪四分六厘

と記して另抄。他のは未見

石垣及土手

本丸石垣は石垣及土手によつて築をしてゐる。石垣は築いてあるのは自石城では本丸だけで二の丸以下はすべて土手である。

本丸石垣の高さは溝下以降四間 積下は六間半後である。その上に自星の土塁を向らしてある。塙築・北側門より西方塙は十三間折廻、西側四十三間、南側西端より裏門迄四十四間、今東側南端迄三十九間、東側南端より北す門迄六十四間折廻し。然表々百九十九間である。石様以後東也石垣一部改替の結果多角的変化を生じた。

土手守、二丸外曲輪（本丸の周回をめぐらす）一四百四十間、外曲輪分、三百六間、合計七百六間

西牆の外丸二里六寸五分の範圍に外曲輪によつて、底土平鋪敷、干七百五十畳五尺と記してある。土手には

相木一百五十六柱、すなは七千六十四本。二丸外曲輪は一周に先本づつ、すなは一周に十本づつで三間の幅で階段が、總は三万一千四百三十尋五尋一尺。

掘

本丸石垣際度三十間余巾三尺余

二ノ丸櫻門外城 五十七間余 巾三間余

二ノ丸内城 長四十八間程 巾二間程

二ノ丸内城 外半内外

二ノ丸大半一ノ門下流城 内繪泥り裏五百間余 巾三面半内外

ニノ丸大坂ノ方流 北の折道裏百八十間余 巾十間より六間位近

三ノ丸 流城 裏百九十間余 巾六間位より二間位近

外繪牆 流城 裏五百間位 巾六間位より二間位近

西門牆より中の奥に計通之塔 裏百五十間程

酒ノ丸より南へ引通し壁 長百二十間程 巾四間程内外

酒 長百間余 内三十間位より十四周位近

本丸内 五層門内井 上口五尺
下口五尺五寸 深八尋

本丸内 五層門内井 上口五尺五寸 深八尋

井

御衣問跡片

御衣問跡片

ニノ丸内 大橋下井下口二尺三寸 深十三尋

二ノ丸中上口四尺七寸 深十七尋

堀ノ底は別名堀川と称し、底木ヨリ白石川を引水し城西面牆より城の腰を四分三周して田町口内より南へ流し水路を中目原谷又西原谷まで開りして源利用水としている。別に西門側西側を介流して源利川を流し城下町に導入して停風殿御屋敷を経て大野路中火御口流す等、日用木工業用水、水車動力用水渠利用水防火用等各方面に利用していく。

建 物

城郭は、地勢地取りによる丸曲輪土手石垣城石垣土木構造第一とし、次に各種の建造物を以

て二水を成す。障事の森がある。櫓、城門、堀、名櫻舍、土蔵等の附屬建築である。自有城には木のような古さがある。時代を通じて、多額の変動がありまた文政二年大火後以後に於くは本丸内の櫻舍の重建物等、かなりの変化をみせていふが主として幕末の資料によつて文に記す。

櫓

白石城では天守閣としてあるが、天守閣に相当するものが本丸の三層櫓である。本丸内には地代

支櫓、坤櫓の二櫓があり、計三区段之方。

三階櫓（乾方）東面北間 南北六間、石垣高五尺五寸。下の重九間、六間、中の重七間、四

間半、上の重耳間、三間、上台七間、五尺四寸八寸。乾ノイニ。ニミ・坤門

未申の方面櫓

南七間、東へ折廻四間

辰巳の方面櫓 南七間、北へ折廻四間 梁行三間、祖西ノす三重。乾一、ヒロ一。

櫓 場

名曲輪の一間に非常の場合臨時に櫓を構築する場所がある。平常は只空場だけである。

二の丸に五ヶ所 三の丸に一ヶ所、外周輪に二ヶ所、ある。

城 内

名御内に通す各門がある。計十六

本丸に二ヶ所三門。本丸大手一ノ門、今大手二ノ門、坂口内 乾内 壇門 南内、中社切門
中の丸に二ヶ所。二門。小坂口門、切置門

庭曲輪に一ヶ所。廻内。

三ノ丸に二ヶ所。大手口廻木門、宮口廻木門

開り丸に二ヶ所。田口門

堀 出し堀 焼門

本丸石垣上に白壁の縁が周りされ、所々に出し堀と称する突出部があり、堀内より、石垣及堀の部分を馬鹿などといふ。本丸西側に二、南側一、東側二、北側二。計六ヶ所ある。

六ヶ所

焼門、堀の壁には外側に対して馬鹿足状鉄錐刺の仄めに小さい開口部を設けてある。
燒門で馬鹿足と呼ぶ二門を焼門と称し、三角、丸、丸、及角の三種がある。丸焼門は高九寸指表裏四寸。角焼門は高一尺三寸五分横四寸、角丸合せて本丸内四百三十九、二の丸及坂口門合計六十八、共計四百九十七へ記録により異動あり、内三角焼門、大檻一、埋門二、廻下二。一説には百石以上の稱式という
大檻術の崩上も伝えられてゐる。

火薬庫は、府庫門合せて三十六。

以上が城郭本とし火薬庫である。別に廻舍土蔵也付廻倉がある

名丸と開口ノ建造物

城郭本と火薬庫の間に次のようにある。

本丸、御成門城へ通じ城の際使用）、表御殿、御門の間、奥殿（城主居住）、及その附屬室、有給

鏡台・書院・鑑室・内宿所

小門

御生茶、於其舍、人工作、御足所、土蔵、薪炭小屋、火鍊堂、馬場、弓鉄砲射場、鳥見所、

平人宿（玄場）

山手九、御膳殿

兩門門、八抱社、侍屋敷

御門脇、お小人長屋、鐵冶屋

扇口柴扉

角口丸、米穀屋、味噌蔵、味噌醤所、内宿所、侍屋敷

米穀庫

作生清木小屋

三の丸

御殿、櫻鏡殿、詰所、酒舎、侍屋敷、外人屋、侍屋敷、白石芋殺所

外内禁

蔵前浦、侍屋敷

現況との对比

○本丸

現在益國公園中代をなす部分、片倉小十郎景潤が築いたものであつて、神明社から北側を通り本丸大手門（一門、裏門）及び二門のあつて御門を跨ぐ西面で、古くは二門だけであったが、景潤は之を小納戸と呼んでの建言にすつて、一門を附加した。慢に一千人の兵を限止せ得たりと云ふ。

一、門の斜めに石垣に附く改変門の名がある。二、門は諸の門で二層門（表六門半櫓二門、一尺三寸

、正面に二枚扉、南側に滑り戸が付いていた。現在この附近に門柱と土台石が六個程度残してある。

二尺余りの函柱が立って、たことが判る、門の左右側から本丸の四隅全部に面する間附の石垣、その上に腰門を開けた白壁の塀が周らざれどいた。大手門の外、南側白高園書館の北隣にこれら門

があつた。扉の上に二階の建物が乗り、裏三階門とも称した（表四門一尺二寸、横三間一尺二寸）。

門門に「月」形にしてみの土塙が生れり、門前には馬出しの土手があり、此門附近は城主の起居する奥方のため不開門と称しきり。本モ入口は以上南北二門である。現在志林園の東壁の口、又西方へ通する橋のあたりは、公園にはつて造られたもの。

大手門を入ると門番宿所長屋があり、北正面向に表立園があり表御殿が東西に長く延びて、北

玄関西方に屏風門があり、藩主入城の際はこの門を入って表御殿から西方の御成御殿に入る。屏風門北側、埋在茶寮のもの所に鐘堂がある。片倉宣重鍾大馬鹿も此所に立てる。西北隅に天守に馬太の三階櫓が立つ。西南隅に神木櫓(ニ階)、東南隅に米櫓(ニ階)が立つ。坤方櫓の下に馬場があり、東側へ至る向付裏方の建物が並み、池があり庭があり池の向に現住茶寮の別にある奉生が庭、之へいた。主要建物は表御殿と平行して三列に東西に長く並んでいた。東方に鍋屋御廻場があり、天守御廷のアーチは元地で、これは城の非常用貯水池をほし、本丸内堀下三天位の所に池より放水口にて三天中位の積水を埋め暗渠式に地下水を集めるようになつた。

〔二〕 本丸西面 現在名風大硝薬桶碑の所を兒童遊園地が二ヶ所で、中は切門を入れるとお座敷が一様馬一尺。本丸ニラ丸中周凹地は南北に長く、馬場に利用され馬見所があり、た。本丸西側石垣下及中筋の裏方用闇に堀が立つた。二ノ丸前方の本丸裏三階門前方の広場は馬鉄砲の練習場があり、その前には高い土手があり裏門前に南の門が中ノ丸に通じ、全く西側と二ノ丸前の接する所に埋門があり中ノ丸へ通じている。中丸から見ても土手がせりて門の現在が判らぬ。そのため本丸近く攻め寄びる敵が馬足け埋門から本丸へから敵の背後をつく跡などに利用された。

本丸禁物下は現在白石高枝々舎の建つ所に勘定所があり、た。そぞ東方に二ノ丸大手一門及び二階東門、長四間一丈八寸、檻二間、矢威間十九、窓三三があつた。大手は古くは北方宮口門へ現白石高筋通へから入つたが北正面では伊達家に贈げた形となつて之後に東を大手先とした。現在の自動車道に近く橋を渡へて邊坡を上形に登つて東門に達した。

東北隅狂狋煙の三角部分が大工屋であった所、千人窟と称し、築居中の集合する所を以していだ。この東北角に櫓場があり、天守の東側に井戸が有つた。現住甘藷がそれであつた。三階櫓下現在駐車場附近を通りその下の扉

坂口門北玄櫓場は現三毛の神社殿の所、此所に太鼓堂があり時を報じた。神明社、久務所附近に兵

火庫が二棟建つ。西北隅に乾門があり中ノ丸に通じた。天満宮社殿西方の高台は櫻場である。人工的に丘陵を切断した陸へからおりて、その南方が川田氏白石氏時代の城郭のあつた所である。中ノ丸はニラ丸西方から南北両方方にかけて一部を櫻屋敷があった。この兩方は前ハ屋えその下は

西ノ丸は天守閣の斜面を沼の丸となす侍屋敷があつた。西方にひょうたん形の沼があつた。

一名米倉沼と称した。城の弱点の一つ所で、此處を防ぐために西輪車庫裏位置にあり。

○西曲輪 中丸とは切通門によつて通じ、西北面に高十間閣後門、星になり岩崎と称へた。西曲輪前

所に石清水八幡社を奠手、年々勧請した。西曲輪は持壁數丈、その南方に西曲輪口があり渴ヶ丸へ通す。

じぬ小路方面に通する。

○沼の丸 現在市野縣球場が造られた沼は田に変りさらば大半埋立でら此でもつた。

○南の丸 宮城の東は南の丸の田町口門である。現在白高枝株有體、ホール及モ南方岩山尾近傍より北側が南の丸であった。白高正門先の田町口門をくは埋門であるため、一名この附近を土門と称した。この門は土手から一旦急に二間程低く土手下に下りざりて、ゆるく登つて田町から西邊する木次街道に接する地安である。そろひ久明前には半円形に土手をめぐらして内部の荒えよいようになつた。環塁平らに道路は、埋立されたのである。

南九岩山毛地内は米の栽培地即ち精米水車及味噌醤油等の味噌窯、かつて場所である。現在道近くあちりや普賢根は古い堀屋の建物と水路も当時とまことである。

莫田輪 現在片倉製絲工場西方一段高い場所、現水堀のある位置がそれである。作事場があり木挽

小屋林木置場其地があつた。

○帶田輪=丸東北隅之下にあり、現在輪郭はいわい西岸の住宅地帯である。鐵治屋、御小人へ古こびと

一長屋(一便走りなどもすむ小屋)が名づけられ

○鹿耳輪 現在神明社入口大鳥居の西側庭園が廻の場所で、東野八郎程を飼養していふ大鳥居の場所に廻門がある。この門現在延命山門として現存する。

○三の丸

東南方莫田輪東方から帶田輪鹿耳輪西方にかけて広い地城である。現在の片倉製絲工場から白石市役所、公立川田病院、白石市民保健館、白石高等商科一帯を北は次崎川で境し、東方は櫛原

の市役所前通りが境である。古くは工手もん堀であつた。

三ノ丸西方流し堀(龍振川)の一段下に中八間前後の堀が鹿耳輪口門前道の西方延三町十五間に亘つて

石柱一列、女子高校運動場中央部分次崎通り南側に廣く土手があつて、三ノ丸の西を区切つて

いた。その外西方に馬場があり、現馬場丁といふ。沢端川は外堀に馬下川を名す。

三ノ丸現市役所裏片倉製絲工場北に載載種製糸諸所等があり、保健所附近に油蔴が並んでいた。

酒蔴は後に次崎電気公会社の所へ移つた。市役所附近に外人屋と称すも、外來居の接待泊所であつた。

本丸の北側あつた。神明社脇居前細小路矢内氏宅内井戸は御腰水に用ひたといふ。

虎の塚からは毎日手桶で助耕が用水を城内に運び工事に供したといふ。

三〇外曲輪 三の丸東方にあり北は次彌川東ほ本町地区西方堤防は塀と土手である。南方は荒見所前
の塀を度に奥曲輪庭である。登記所が詮議所のあつて場所其の他古本町現在国道四号線に沿つて
特屋敷である。

現存する城郭建築物之四
現存本丸石垣は南校北入口付近より北方対角及三階櫓下にかけて底部より一間高さ以上所には現存
してゐる。大部今昔石垣である。東丸部には元禄年間に築築直一尺張部分の新式石垣が残つてゐ
るが判る。

三階櫓下の門戸は昔の戸戸である。二ノ丸の外形はぼく残り、北が神明社殿によつて一部守矢をして
いる。西曲輪への切通し門址 西曲輪の形体は大半残存し、西曲輪口及土手もわかる。中ノ丸北半
の土手下の空堀の形はゆがり難い。沼の丸は野球場で沼と共に形を変え、中ノ丸及び二ノ丸曲輪の土
手はすべて白面グランードで変形破壊してしまつた。南方大空堀は道路とはつて掘り下げ塙の拡げられ
て、田町口門の凹所はその際埋立され、附近の塙と共に形を失つて、

南の丸西半部は白面体有牆 水泳プール建設で形を変えたがお湯屋附近水路は当時のまゝ水車小屋
の一根も外郭はそのまゝ残してある。前後兩方の土手は平らになつた道路の兩側に残つてゐる。
三の丸内ノ塀は全部埋没、東方土手は大部分破壊し塀も埋めて道路に変じた。
外曲輪の土手及塀のうち塀場の形だけは大手見阿子貢献年鑑所民宅地内に凸としておもひげをの
こし、向万鉢木民宅地内には原反土手の一端が昔ながらの形を保つてゐる。

現存する建築 磁石 砂

茶室一棟 白石市西門公園本丸茶室傍

府門一棟(一部變形) 白石市延命寺山門

磁石

しゃう丸本丸内櫓に使用されたもの一对

瓦

本丸大手門其他門柱礎石が六個程公園にあり、一個は後述の前櫓礎石に使用されてゐる。

白石市蔵本

菊地民衆民宅

しづら瓦

本丸製瓦廻用のものと一対

白石市小穂温泉いすみ火葬場

般に一二、存症しえいる。

片倉家火葬場

森合にあつた米糀倉

一棟

現地にあり

白石市森合神明

佐久間大進氏宅

坂谷にあつた煙硝倉

一棟

移転して現在

白石市坂谷

古山左衛門民宅

白石市坂谷

古山左衛門民宅

附 約

白石城はその沿革によつて廻り水のよつて東北地方に居住する族部中で特に周ヶ原合戦、潤治姫新戦等中失々日本史に直接する歴史として重要であつた。

地形、石垣の全形は一部残存たりであるがその大体は序あ頗るい約分のことが云ふべし。

白石城址は史跡として、二水以上の破壊を防ぎ旧態をとさう限り保尼下さうまう手段を施す必要を認爲

参考文献

伊達家右家記録

伊達政宗御伝記資料

毛翁聞書

片倉代々記

登木伊達氏十五代史

奥羽盛衰見聞誌下編

前卷有樂

赤井畠氏出入司案兒

大内幸之助翁筆錄資料

刈田郡誌

刈田郡丁史年表上卷

白石城解体の記さ?

自理格郎居

小室資料

後藤資料

巨理資料

中目資料

端櫛錄

橋本資料

成敏錄

保科資料

白石城下稿

片倉資料

四